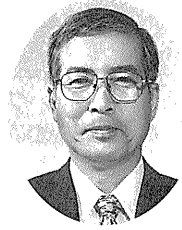


ずいそう

冬道雑感

三浦弘志



何処の雪国でも同じと思うが、北海道の冬も、①雪が降り積もること、②凍結すること、③雪融けになること、の3つの事象との戦いである。現代をもってしても、いかんともしがたい現象である。

「むしろ、あまり気を張らずに冬を楽しめばよい」という事であろうか。従来からの（20～30年前）クロスカントリー、ジャンプ、スピード、フィギュア、アイスホッケーなどに加えて、カーリング、モーグル、ハープパイプ等、様々なスポーツが出て来ている。冬を恵みと受け取り、観光やスポーツなどの冬ならではの「楽しみ」に転換しつつある。

また、昭和新山の町、壮瞥町では、今、雪合戦の普及に一生懸命である。国際的なスポーツに、将来はオリンピック（冬季）種目にしたいとの大きな夢で取り組んでいる。世界に大きく広がるよう暖かい目で応援していきたいものである。

さらに、稚内ほか全道各地で、近年犬ゾリ大会も開かれている。本当に冬ならではのスポーツ・レジャーが生まれている。

さて、久しぶりに雪が多かったと言われる今年の北海道の冬は、降雪量がとび抜けて多かったわけではない。2月上旬は、全道的に最も冷え込む時期と言われる。それを過ぎると気温は次第に上昇傾向になるのが、今年はそれが低めに推移し、2～3月の積雪量の減少にブレーキをかけたため、雪が多いと感じたのではとの事である。

この厳冬期の2月3日～5日、旭川市で2005年の冬トピアフェアが開催され、併せて除雪機械の展示・実演会が開催された。この日程に合わせて、留萌、稚内、浜頓別、歌登などで用事を終えながら、2月1日札幌出発、稚内泊、旭川市へと約600kmの道北地方の冬道を走った。これだけの距離を走ると、吹きだまりや吹雪に遭遇するだろうとの期待(?)に反して、2日間の晴天の下、6カ所の作業区間を通過するも、一昔前とは格段に安全・安心が実感出来る快適な冬道を走ることが出来た。しだいに厳しくなる予算の中で、効率的、効果的な除雪作業に心がけているとのことであった。本当に良くやっていると感じた。

2月3日の展示・実演会の会場は、外気温(−10℃)

が上らずとにかく朝から寒い。主催者である小野協会長が、寒中オーバーをぬいで開会のご挨拶をされた姿には、心から感激したしだいである。会場には全道各地あるいは全国から延べ人数で4,600名を超える大勢の見学者の入場をいただき、大成功であったと思う。それにしても、機械の改良工夫の早さにはただただ驚くばかりである。この会場を運営し盛り上げてくれた多くの関係者に感謝するところである。無理な事ではあるが、除雪機械の実演に子供達でも試乗させられたら、若い後継者が出てくることは間違いないと思ったのは私だけではないだろう。

3月下旬になり気温が少し上り始めると一気に雪どけが始まる。北海道では、この時期ほど春らしい風情を示す時はないだろう。木々は若干のズレはあっても、これから、こぶし、梅、桜、レンギョウ、ツツジなどが次々と咲きはじめるのが見られるのは本当に楽しい。草々も然りである。何故かしら待ちかねたように皆一斉に緑になり花をつけはじめる。

また、大半の道路は、路側からの融雪水で、車道や歩道に水たまりが出来る。歩行者も車も共に迷惑しながら、しかしいつもの事だとしながら通行している。この状態があっという間に終わるのを判っているからである。

今年は、郊外部の団地などの生活道路では、スリパチ状の道路がよく話題となった。又所によっては、3本ミゾの輪だちに悩まされることも多かった。いずれも、非常に危険極まりない状況にあるが、すれちがう時は、慎重にそして高度なドライブ技術を必要とする。が、ドライバー諸君は、あわてる様子もみせず、しかも互いに気づかいながら見事なすれちがいをするのである。とにかく、お互いにガマンをして生活する中に、路側や路地裏の残雪が目に見えて小さくなり、路面が乾き、歩きやすく、走りやすくなっていくのが判っているのである。

冬道は、毎年走りやすくなって来ている。希望すれば、安心・安全に何処へでも走れる時代になった。本当にありがたい事と心から感謝している。